様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４６０３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５１０３９０

研究課題名（和文）生殖とセクシュアリティの近代－東アジアにおける「近代家族」とジェンダー

研究課題名（英文）Reproduction and Sexuality in Modern Era in East-Asia

研究代表者
宮坂　靖子（MIYASAKA, Yasuko）

奈良大学・社会学部・教授

研究者番号：３０２５２８２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,200,000円

研究成果の概要（和文）：女性の主婦化と「性－愛－結婚」三位一体観とを特徴とする日本の近代家族の生成・存続を可能にしたのは、植民地（朝鮮、台湾、満洲）の存在であった。日本帝国主義は植民地政策において、近代的教育制度と近代公娼制度を利用して、ジェンダーと民族を差異化し階層化することによって、近代家族規範を成立させた。
　近代家族の「性－愛－結婚」三位一体観は、家族への性愛規範の普及によってのみ成立したのではなく、近代公娼制の存在を必要とした。しかし、近代家族規範は日本国内においてのみ完結したのではなく、日本（宗主国）の外部である植民地に近代公娼制度を移出することにより、自らをより強固なものとしたのである。

研究成果の概要（英文）：　It was the existence of colonies (Korea, Taiwan, and Manchuria) that made possible the formation and continuation of the Japanese modern family, which was characterized by the housewifization of women and the trinity of “sex, love, and marriage.” In its colonial policy, Japanese imperialism used modern education and state-regulated prostitution systems and prompted the establishment of modern family norms through the differentiation and hierarchization of gender and ethnicity.
　The trinity of “sex, love, and marriage” was not simply formed through the dissemination of sexual norms within the family, but depended on the existence of modern state-regulated prostitution. However, the establishment of modern family norms was not concluded entirely within Japan (the suzerain state); rather it was achieved by transferring the modern state-regulated prostitution system to the colonies.

研究分野：家族社会学

キーワード：国際研究者交流　ジェンダー　近代家族　セクシュアリティ　日本近代　東アジア　植民地

１．研究開始当初の背景

日本における近代家族論は、主に、家族社会学と教育史を中心に展開されてきたため、近代家族「内部」の、しかも特に母子関係に関心を払ってきた。それゆえ「子ども」・「母性」・「家庭」をキーワードとした「生殖・パースペクティブ」優位のアプローチ法が主流となってきた。

しかし、このような研究動向は、第一に、近代家族の形成と変容を「夫婦の性愛化」の視点から分析・考察することを妨げることになった。また第二に、仮にセクシュアリティの視点を盛り込んだとしても、近代家族「内部」の夫婦の性関係にアプローチするにとどまるものであった。

このような家族社会学における近代家族論に対し、近年、学際的なセクシュアリティ研究とジェンダー史研究において、新たな視点での研究が行われるようになった。セクシュアリティ研究では、近代家族「外部」の娼婦や妾などの「反家族」的な「セクシュアリティ・パースペクティブ」が多くの成果を生み出し、また、ジェンダー史研究からは、日本国内（内地）のみならず、植民地（外地）との関係を視野に入れた上で、広域的、重層的な視点で研究を進めることの必要性が示唆された。

２．研究の目的

本研究の目的は、近代日本（明治・大正・昭和前期）における「近代家族」と「セクシュアリティの近代」にかかわる言説の生成と変容のプロセスを明らかにすることである。その際に、上述のセクシュアリティ研究とジェンダー史からの示唆を受け、第一に、家族内部／外部（反家族）の双方を視野に収めること、第二に、日本国内（内地）のみならず、植民地（外地）までを包摂した東アジア地域（植民地圏）における家族とセクシュアリティに関する言説を分析対象とすることとした。

具体的に設定したアプローチは以下の３つで、これが分析枠組みを構成している。

①「近代家族・内部」×「生殖／セクシュアリティ・パースペクティブ」アプローチ
②「近代家族・外部（反家族）」×「セクシュアリティ・パースペクティブ」アプローチ
③「日本（内地）×植民地（外地）」東アジア比較アプローチ

また、東アジア地域としては、日本の帝国主義により植民地化された朝鮮、台湾を中心に扱い、必要に応じて、中国（満洲）を考察に加える。

３．研究の方法

①「近代家族・内部」×「生殖／セクシュアリティ・パースペクティブ」アプローチ

明治期に刊行された『女學雑誌』『女鑑』、大正期に刊行された『主婦之友』『婦人公論』を中心とした女性雑誌を資料とする。明治期においては、特に「家庭」言説、「女性教育」言説を分析の対象とする。大正期～昭和初期においては、「避妊」に着目し、近代家族における「性－愛－結婚」三位一体観の成立プロセスの考察を通して、日本の近代家族の成立を解明する。

②「近代家族・外部（反家族）」×「セクシュアリティ・パースペクティブ」アプローチ

明治以降の家族外部のセクシュアリティに関する言説調査を行う。総合雑誌、文芸雑誌、女性雑誌等を中心的な資料とする。特に、芸娼妓、妾、愛人等のキーワードを設定して、それに関連する言説を分析対象とし、「近代家族・外部（反家族）」のセクシュアリティ言説の生成過程を解明する。

③「日本（内地）×植民地（外地）」東アジア比較アプローチ

（1）朝鮮

植民地朝鮮において発行された雑誌（『新女性』『朝鮮及び満洲』など）、また、植民地朝鮮を描いた小説・随筆等から、植民地朝鮮におけるセクシュアリティ言説を精査し、日本（内地）におけるセクシュアリティ言説と比較検討する。また、植民地朝鮮における日本統治期の施設、旧遊郭地域におけるフィールドワーク調査を実施し、植民地朝鮮における内地男女/外地男女の生活空間領域を解明する。

（2）台湾

まず、植民地期において女性向けにどのような雑誌が刊行されていたのかの詳細を国立台湾図書館において調査する。婦人向けの雑誌を分析対象として内地から移出された近代家族言説、及び女性の役割言説を分析する。また、台湾における日本統治期の施設、旧遊郭地域におけるフィールドワーク調査を実施し、台湾における内地男女/外地男女の生活空間領域を解明する。

（3）中国

近代家族の成立期である 1920 年代に刊行された女性雑誌（『婦女雑誌』など）を資料として、避妊の受容とセクシュアリティ言説を考察する。また、時代的には少し異なるが、満洲地域における植民地支配関連資料収集のために地元図書館を訪問するほか、関連施設のフィールドワークを実施する。

４．研究成果

４-１　日本国内【内地】

（1）近代家族・「内部」のセクシュアリティ

1920 年代には、『主婦之友』誌上で避妊に関する記事が増大するのみならず、実社会においても、避妊相談所の開設などにより、避妊の知識や具体的方法が新中間層へと浸透

した。他方で、同時期に、夫婦の性的和合に関する記事が誌上に掲載された。

しかし、両者には言説の担い手に違いが見られた。避妊言説を担ったのは、産児調節運動家であったのに対して、性的和合言説を担ったのは医師であった。しかも、後者（性的和合言説）は、性的技工を用いた性的快楽の享受の重要性を説くものであったにもかかわらず、避妊に対して批判的であった。一方、前者（避妊言説）では、性的快楽の享受と切断された生殖コントロールの手段としての避妊のみが容認されていた。

つまり、両者は 1920 年代という同時期に登場した言説であるにもかかわらず、言説の担い手は分断され、避妊と性的快楽の受容に関して相反する立場に立っていた。しかし、「制欲」を重視する点で両者には一致が見られた。近代家族「内部」に家族「外部」（反家族）から、性愛言説が越境してきたものの、そのための手段として推奨されたものが避妊ではなく「制欲」であったため、夫婦の性における「生殖と快楽」の分離は困難であった。

「性－愛－結婚」三位一体観の成立は近代家族のメルクマールとしてしばしば指摘されるが、その成立過程は一枚岩ではなく、理念と現実の間には埋めがたい乖離が生じていた。

(2)「近代家族・外部」（反家族）のセクシュアリティ

家族内部／外部（反家族）の双方を視野に含めるため、明治以降の家族「外部」のセクシュアリティに関する言説調査を行った。

基礎作業として、近代以降の総合雑誌、文芸雑誌に掲載された近代家族の「外部」としてみなされる芸娼妓、妾等の言説を収集した。

特に、近代において芸娼妓を描くことが初めて問題となった「傾斜小説」ついての言説群については、芸娼妓を描いた文学に対する評価が、江戸期における遊廓文芸に対する通や粋という評価軸から、売春に従事する女性を「醜業婦」をみなす近代公娼制導入後の価値観が反映されるものに変化したことを明らかにした。

さらに、「売春婦」と「貧民」が「変態」のカテゴリーで語られる言説群を明治から大正期にかけて調査し、家族外部のセクシュアリティは、家族外だけではなく、社会外の存在として周縁に位置づけられ、貧困や社会矛盾を写す鏡となっていることを明らかになった。以上のように「外部」のセクシュアリティは近代家族のみならず近代日本を写す反射鏡として有効な切り口であることを確認した。

４－２　植民地【外地】

(1) 朝鮮

植民地朝鮮のパートにおいては公娼制度の移入という観点にポイントを絞り、まず基礎作業として日本の公娼制度についての文献、植民地朝鮮の公娼制度についての資料の収集を行い、韓国語文献については随時、翻訳作業を行った。

植民地朝鮮においては、日本から公娼制度を移入することにより家族「外部」のセクシュアリティを管理しようとした点は、日本と同じであるが、日本人用遊廓／朝鮮人用遊廓というように民族別の地域区分をした点が異なっており、そこに植民地朝鮮における矛盾が表出している。つまり、「日本人男性⇒日本人女性⇒朝鮮人男性⇒朝鮮人女性」という植民地の序列化の下層に性産業に従事する女性達が位置しており、さらに、その女性達は、日本人女性と朝鮮人女性に差別化される。当時の植民地朝鮮を支配する力は、朝鮮総督府に象徴されるような法や権力だけではなく、遊廓のように、娯楽や快楽を提供する場にも及んでおり、植民地のセクシュアリティを問うことは、日本の近代化そのものを問うことと直結している。

近代は、近代家族の規範が成立する過程であり、同時に、近代公娼制度が成立する過程でもある。さらに、植民地政策においては、公娼制度そのものを植民地（外地）に移植していった。家族「外部」のセクシュアリティは排除されるのではなく、近代公娼制度のもと近代の秩序に組み込まれる。国家の基礎単位となる近代家族の成立と、家族「外部」のセクシュアリティは矛盾するものではなく、いずれも近代化にとって〈必要〉とされたものである。それゆえ、植民地（外地）においても公娼制度が移植され、内地人、外地人のセクシュアリティの管理がなされた。植民地朝鮮のセクシュアリティは近代家族の規範のみでなく、日本の植民地主義の反射鏡ともなっていることが明らかになった。

(2) 台湾

台湾で発行されていた女性向け雑誌『台湾婦人界』、『婦人と家庭』において、近代家族・良妻賢母の生成が、日本（内地）と同様に、植民地台湾（外地）でも急務であると主張されていた。しかし、その対象は台湾在住の日本人女性であり、台湾人女性ではない。日本人女性が、台湾で温かい家庭をつくり、子どもを育て定住することを常に求めている。特に台湾での子育てに関しては、家庭での日本語、日本人としての振る舞いに注意が払われ、日本国民としての資質をいかにして低下させないかが問題となっている。

日本人男女一対での台湾に移住し、子どもを産み育てることが安定的統治につながると捉えられ、台湾統治の緊急課題とされた。近代家族・良妻賢母言説は植民地（外地）統治の重要な一要素として構築されている。

その一方で、「反家族」の制度として「醜業婦」言説が常に対置され、彼女らを貶めることで、良妻賢母規範や「性－愛－結婚」三位一体観を称揚し、台湾在住の日本人女性と

台湾人女性の連帯・「同化」を図ろうと画策された。しかし、そのことは、台湾人（外地）女性を日本国民として包摂しつつ、同時に差異化・排除するという構造に組み込まれていた。

（3）満洲

「満洲」地域の要所であった長春、ハルビンにおいても、日本式遊廓が移植された。植民地朝鮮・台湾と同じく、日本の支配のもと、多くの日本人が移住し、鉄道が敷設されるにしたがって、満洲各地に遊廓が浸透した。

植民地朝鮮の遊廓が日本人用／朝鮮人用と二つに分離されていたのに対し、満洲においては、日本人、中国人、そして植民地朝鮮から移動してきた朝鮮人の三者（と少数の台湾人、ロシア人）が、性産業に従事していた（この点は、台湾と同様である）。

また、日本（内地）、植民地朝鮮（外地）と大きく異なるのは、日本や朝鮮は、公娼制度下の法制度の対象となったのは「娼妓」「芸妓」「酌婦」であったのに対し、満洲では「芸妓」「酌婦」のみで、「娼妓」を用いていない。

日本、朝鮮、満洲を家族外部のセクシュアリティという観点から比較した場合、外地（朝鮮、満洲）には、日本（内地）にはない「民族」という観点が導入される。二つの民族、もしくは多民族が混交する朝鮮、満洲（外地）のセクシュアリティのあり方は複雑であるが、日本（内地）では見えてこない階層性・差別性の問題が外地（朝鮮、満洲）にはある。

階層性・差別性が目に見えるのは、それぞれの民族の居住空間、遊廓の場所が異なることであるが、その他にも外地体験のある文学者の紀行文等から外地のセクシュアリティの様子を伺い知ることができる。

４－３　結論

女性の主婦化と「性－愛－結婚」三位一体観を特徴とする日本の近代家族の生成・存続を可能にしたのは、植民地（朝鮮、台湾、満洲）の存在であった。日本帝国主義は植民地政策において、ジェンダーと民族を差異化し階層化した。その具体的経路として利用されたのが、「新女性」を媒介とした教育制度と、女性を二分化する近代公娼制度であった。

近代家族「内部」の「性－愛－結婚」三位一体観は、日本国内（内地）における家族「外部」の近代的公娼制度によって支えられたが、日本国内（内地）においてのみ完結したのではなく、日本「外部」である植民地（外地）に近代家族規範・良妻賢母規範、および近代的公娼制度を移出することにより、日本（内地）近代家族規範をより強固なものにしたと考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①光石亜由美、中島敦「プウルの傍で」における－朝鮮人遊郭の表象と〈越境〉への欲望－、日本言語文化、査読有、29 巻、2014、417-438

②磯部香、植民地「台湾」言説を巡る日本女子と家族－明治期の女性向けメディア『女学雑誌』『婦女新聞』を分析対象として－、奈良女子大学社会学論集、査読無、No.21、2014、35-51

③宮坂靖子、大正期における産児調節運動の展開と普及－産児調節相談所の活動とその利用者－、家族関係学、査読有、No.31、2012、37-48

〔学会発表〕（計 13 件）

①光石亜由美、植民地朝鮮のセクシュアリティ、「東アジアの近代家族とセクシュアリティ」第 3 回公開研究会、2015 年 2 月 11 日、国際奈良学セミナーハウス（奈良県奈良市）

②磯部香、植民地台湾における近代家族とジェンダー、「東アジアの近代家族とセクシュアリティ」第 3 回公開研究会、2015 年 2 月 11 日、国際奈良学セミナーハウス（奈良県奈良市）

③宮坂靖子、夫婦和合論における「性的和合」言説の構成とその意味－1920 年代『主婦之友』を資料として－、（一社）日本家政学会第 34 回家族関係学セミナー、2014 年 10 月 12 日、大妻女子大学（東京都千代田区）

④光石亜由美、植民地朝鮮における〈遊郭〉という空間－中島敦「プウルの傍で」を中心に－、韓国日本言語文化学会、2014 年 5 月１０日、誠実女子大学（韓国ソウル市）

⑤光石亜由美、〈韓流〉と〈日流〉の先にあるモノ－創造と変容をめぐるいくつかの事例－日本近代文学会例会、2013 年 12 月 1 日、日本大学（東京都千代田区）

⑥宮坂靖子、「性的和合」言説の構成とその意味－1920 年代『主婦之友』の夫婦和合言説から－、「東アジアの近代家族とセクシュアリティ」第 2 回公開研究会、2013 年 10 月 27 日、慶應義塾大学三田キャンパス（東京都港区）

⑦光石亜由美、〈厭妻〉小説の系譜、東アジアの近代家族とセクシュアリティ」第 2 回公開研究会、2013 年 10 月 27 日、慶應義塾大学三田キャンパス（東京都港区）

⑧磯部香、日本統治期における「家庭」言説をめぐる家族とジェンダー－『台湾日日新報』を分析対象として－、（一社）日本家政学会第 33 回家族関係学セミナー、2013 年 10 月 6 日、奈良大学（奈良県奈良市）

⑨光石亜由美、〈売笑婦〉は〈変態〉か？－前史としての〈貧民〉との隣接性－、メタモ研究会、2012 年 12 月 16 日、早稲田大学（東京都新宿区）

⑩宮坂靖子、避妊をめぐる言説の構成とロジック－セクシュアリティにおけるジェンダー非対称性－、「東アジアの近代家族とセクシュアリティ」第 1 回公開研究会、2012 年 12 月 2 日、慶応義塾大学三田キャンパス（東京都港区）

⑪光石亜由美、〈花柳小説〉の受容と消費－明治 20～30 年代、〈芸娼妓〉が描かれた小説の評価をめぐって－、「東アジアの近代家族とセクシュアリティ」第 1 回公開研究会、2012 年 12 月 2 日、慶應義塾大学三田キャンパス（東京都港区）

⑫宮坂靖子、産児調節運動における避妊の実践とその利用者、（一社）日本家政学会第 32 回家族関係学セミナー、2012 年 10 月 28 日、岡山大学教育学部（岡山県岡山市）

⑬磯部香、日本統治期における台湾の家族・女性言説、（一社）日本家政学会第 32 回家族関係学セミナー、2012 年 10 月 28 日、岡山大学教育学部（岡山県岡山市）

〔図書〕（計 1 件）
①光石亜由美（分担執筆）、井上章一・三橋順子編（執筆者：磯田道史、井上章一、梅川純代、加藤政洋、河原梓水、齋藤光、渋谷智美、永井良和、朴貞愛、原武史、古川誠、眞杉侑里、光石亜由美、三橋順子）、『性欲の研究』、平凡社、2015、総 299 頁、分担箇所：梶山季之の『京城昭和十一年』－京城の歓楽街を歩く－、184-192

〔その他〕
ホームページ
①MS 研究会（東アジアの近代家族とセクシュアリティに関する研究会）
http://www.ms-kenkyukai.jp/index.html

６．研究組織
(1)研究代表者
宮坂　靖子（MIYASAKA, Yasuko）
奈良大学・社会学部・教授
研究者番号：３０２５２８２８

(2)研究分担者
光石　亜由美（MITSUISHI, Ayumi）
奈良大学・文学部・准教授
研究者番号：９０３８７８８７

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
磯部　香（ISOBE, Kaori）
大連外国語大学・日本語学院・外籍教師